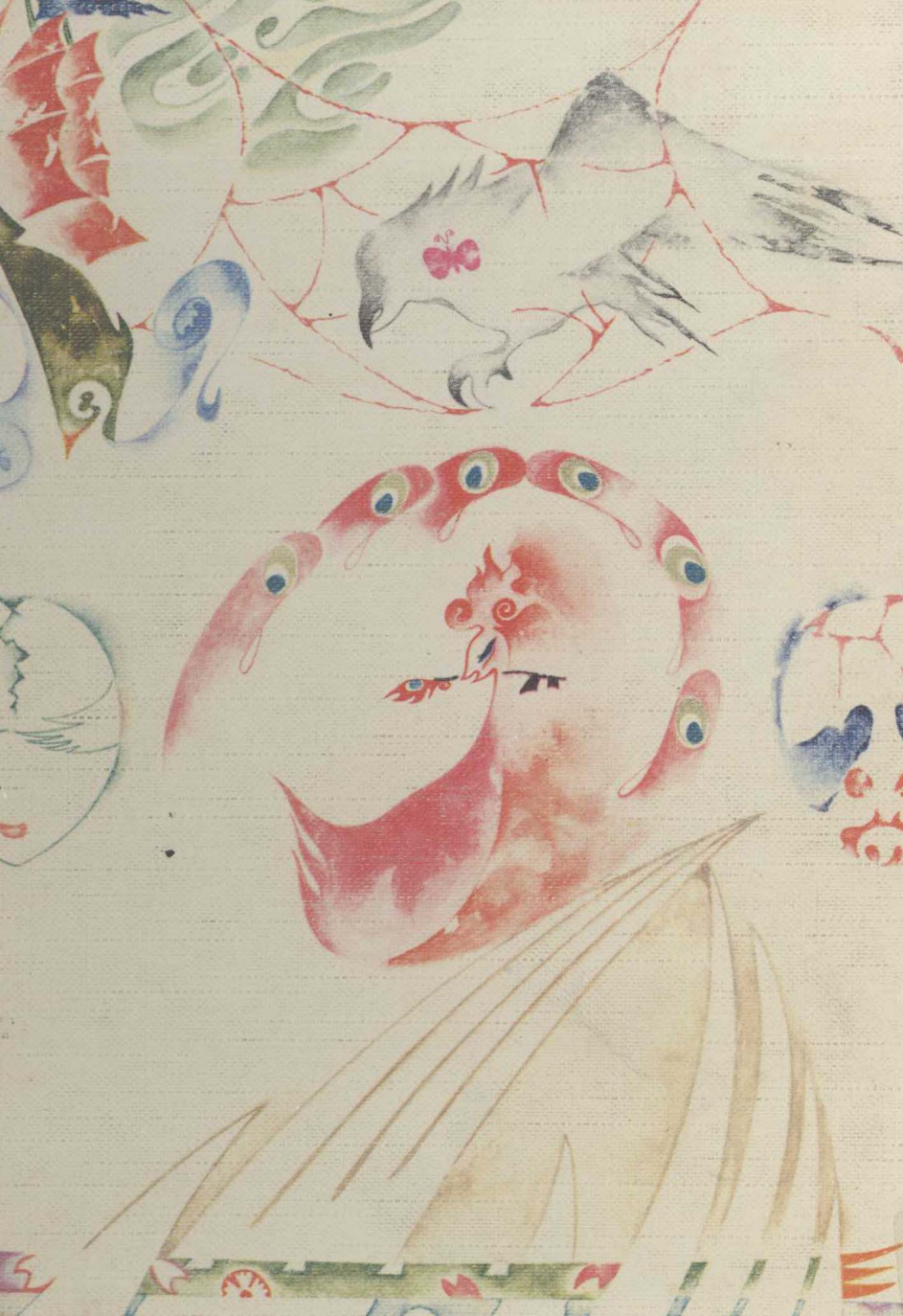

新諸國物語

笛吹童子 上

北村壽夫 著

日音版

昭和四十七年十一月三十日初版発行

新諸國物語　I　上
笛吹童子

〈著　者〉北村壽夫
〈発行者〉日音
代表者　秋本茂
〈編集者〉日本アート・センター
東京都千代田区神田神保町一―一二五
電話〇三―二九四―三八九一（代表）
〈印刷者〉特進印刷
東京都千代田区西神田二―七―一二

〈発行所〉株式会社日音
〈出版　営業部〉
東京都新宿区戸山町四三（日本駐車ビル）
電話〇三―二〇二―〇三〇一（代表）
〈本　社〉
東京都港区赤坂五―三―五〇（TBS別館）
電話〇三―五八四―四七一一（代表）
落丁・乱丁本はお取替えします

目

次

吹雪の夜 7
脱走 11
母のこころ 20
くらがり峠 29
父の秘密 35
三本松城 43
笛吹童子 48
二つの仮面 53
貿易船 57
玄海灘 63
はなれ小島 71
消えゆく船 78

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

道二つ 85
城落つ 95
赤柿玄蕃 103
かくれ家 110
班鳩隼人 114
髑髏の面 131
噂 141
旅のむすめ 150
裏ぎり者 160
奇怪 171
夜の雨 178
浅茅 182

桔梗の花　191
ちぎれ雲　198
黄龍天上　208
霧の小次郎　215

吹雪の夜

「桔梗！　桔梗！　あかりをつけてたも。だいぶんに、あたりが暗うなってきました……」

「はい」

くりや（台所）のほうから、かわいい返事があった。

ごうごうと音たててふきすさむ吹雪の夕暮れである。

母の浅茅は、いっしんに機を織っていた。が、もう、がまんにも手さきが見えなくなった。その見えない手さきを動かして、なおも、手機を織りつづけている。

「おそうなりました」

小さい燈台に灯をつけて、娘の桔梗がくりやから出てきた。まだ、十七か八の、美しい娘である。娘はさげてきた小さい燈台を母のそばにおいた。

「母上！　もうおやめになっては？　……さきほどからめっきり冷えてまいりました。おからだにさわります」

が、ふり向きもしないで、浅茅は機の手を動かしている。
「なんの……年はとってもきたえたからだ。それほどの弱虫ではない」
「……私がかわりましょう」
「いえいえ。お前こそいろりに榾（未切れ）をたんとくべてぬくもるがよい。しばらく吹雪もこなんだが、ひさしぶりにひどい吹雪になってきました。雨戸はすっかりしめましたか」
「はい」
「……そなた、おなかも空いたであろう。そろそろお夕飯にしましょうぞ」
「ただいま、作っております」
娘の桔梗は、またくりやへと去っていった。
母の浅茅は、まだおさ（はたおり道具）を運ぶ手をやすめない。
荒れくるう吹雪の音が、まるで、たちさわぐ大海のとどろきのように聞こえる。まずしい雨戸は風にあふられ、烈しくぶつかる雪の勢いで、たえずガタガタと鳴っている。まるで、小さい家はゆれているようだ。
その凄まじい吹雪の中に、どこからかとぎれとぎれに聞こえてくる入相の鐘……
ほんとうにものさみしい夕暮れである。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「母上！　おしたくができました」
と、やがて、桔梗は、膳をもってくりやから出てきた。
「ご苦労！　……では、いただきましょうか」
浅茅は、おさをやめて、やっと、機を下りてきた。
桔梗は、燈台を、膳のそばに運んだ。
母と娘は、膳の前にすわった。
「きょうは、芋がゆをつくりました」
「おお。それはよかった。こんな日にはもっけのごちそう……ではいただきます」
まずしいけれど、親子二人のたのしい食事だ。
「母上！　ひどいお天気でございますね。父上や兄上はどうしておいでしょう。お城の中はさぞ、ご不自由でございましょうね」
「さだめし……なにせ、お城をかこんでいる野武士勢のいきおいは強く、日に日にお城はあぶなくなってゆくとか……」
「……もう、城中ではたべものがなく、馬を殺してたべているとか、もっぱらのうわさです。たべものも水も、おそらく燃やすものもとぼしいでしょう。こんな日はどんなにお寒いか……それ

を思うと、こうしていろりに榾をくべてあたっているのも、もったいないように思われて……」
「そうそう。ご苦労なことじゃ」
浅茅もホッとためいきをついた。
「……籠城もすでに半月。でも、お城のかたがたの頼もしいこと。あれだけの敵に攻められながら、まだ、城内の曲輪（土や石できずいたかこい）ひとつとられてはいなさらぬ」
「それどころか、野武士が攻めると、まだまだ上から大木や大石を雨のように落として防いでいられると申します」
「お城の中のみなさまが元気をなくしておられぬ証拠じゃな」
「そうです。その勇ましいお城のかたがたの中に、父上も兄上もいられるのかと思うと、わたくしもなにやら肩身がひろいようで……」
箸をとりながら、二人の心は遠くにとんでいた。思いは同じ満月城である。

脱走

満月城は、この村から三里。古い昔から近隣に名をしたわれた名城で、いくたびもその城主はかわったが、城はそのままにつづいて、いまは丹羽修理ノ亮がそのあるじ。

時は室町時代――足利幕府の勢威まったくおとろえて、名にしおう応仁の大乱のあとだ。花の都は焼野と化し、天下また麻のごとく乱れ、野盗は横行し、人は家を失い、世の秩序は失われてしまった。強いものは斬りとり強盗勝手しだい、いやはやお話にもならない暗黒時代である。

がんらいが、応仁の乱というのは、足利幕府の権臣、執事職の細川家と侍所の大将である山名氏との勢力あらそいから起こったもので、この大乱は前後十数年もつづいた。そのために、天下の大名もそれぞれの勢力に別れて、いたるところ平和の里なく、ために世はかりごもと乱れきったのだ。

大乱のために主君を失った浪人群。このどさくさに、功名をあらそおうとする野心の徒は、いたるところで乱暴ろうぜきを働いた。

丹波の満月城――そこも、安全ではいられなかった。満月城は一団の野武士どもにかこまれたのである。

その野武士の首領は赤柿玄蕃。ともかくすじのいい人物ではない。

満月城の城主の丹羽修理ノ亮は、情のふかい城主としてこのあたりに名高かった。

理不尽な野武士の襲撃をうけて、いくたびか、都の幕府にそのあやうきを告げ、助けをもとめたが、なんの助けもこぬ。それもそのはずだ。幕府もすでに力を失って、権臣どもが血まみれの私闘をくり返している。山国の一城の運命などにかかりあっているひまがない。

満月城は、日に日にあやうくなった。が、城の将士は、がんとして屈服しない。餓えては軍馬を屠ってくらい、かわいては負傷者の流す血汐をのんで、あくまでも城を守っているのである。

その籠城の将士の中に、浅茅のつれあいであり、娘桔梗の父である上月右門と、桔梗の兄である息子の左源太もまじっている。まじっているどころではない。上月右門は丹羽の老臣として、城内の大黒柱だ。

だから、浅茅と桔梗の住んでいるこの家も、いわば、誰にも言わぬかくれがである。

右門と左源太を城の中に送っている母と娘は、けなげにも、わずかな機を織り、それを少しのお金にかえて暮らしているのだ。

「母上！　ご飯のおかわりは？」
「いえ。どうやら、ほしくありません。そなた、えんりょなくおたべ」
「わたくしも、もうたくさんです」
「……どうしてじゃ」
「……お城の中の父上や兄上を思うと……もったいなくて……」
わずかに椀に一ぱいか二はいの芋がゆだ。が、籠城の将士たちは、きっと米などはたべられまい。それを思うと、二人とも、もったいなくて箸をとる気になれないのだ。
「おお、また荒れてきたらしい」
と、母の浅茅は、ふと、気をかえていった。
気のせいか、外の吹雪はますます烈しくその勢いをましてくる。雪をまく凄まじい風音は、縦横むじんにかけまわる魔神の叫びのようだ。風にあふられる雨戸がガタガタ鳴って、いまにもはずされそうだし、家ぜんたいがゆれているようで、その不安さといったらない。
「母上！　もう、お膳をさげましょうか」
「ああ、さげて下さい……」
桔梗が膳をさげてくりやにいったときだ。

どっと吹きつける雪嵐の叫びの中に、ふと、人の声を聞いたような気がした。
桔梗は耳をすました。心のまよいかしら。すると、こんどははっきり聞こえた。
「あけてくれ。あけてくれ」
声はくりやの外である。しきりに戸を叩いている。
「どなた？」
桔梗が聞いた。
「どなたです？」
「兄だ。左源太！」
外の声が答えた。その声も、ちぎれちぎれに風で吹きとぶ。桔梗ははっとして、土間におりた。心張り棒をとった。と、外からガラリと戸をひきあけて、雪にまみれた一人の男が飛びこんできた。飛びこむなり、男は自分で戸をしめ、しっかりと、それに心張り棒をかった。
「桔梗……」
「兄上……」
土間に立って雪まみれのかっぱをぬいだのは、兄の左源太。一ヵ月ぶりだ。
「兄上……どうして、いまごろ？」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com